SSW 通信　No.11　2025 年 7 月

スクールソーシャルワーカー　田仲　輝男

「AI は間違わない？」

人は間違うからいい

○先日、相談支援コーディネーターの研修を受講してきました。その研修の中で、A 大学の B 講師から、多重苦を抱える C さんのケースについて課題が出され、グループワークをしました。このケースは実在するものではなく、AI に作らせた、とのことでしたが、この見本ケースがとても良くできているのです。「あー、こういうケースあるある」というもので、グループワークでも実際のケース会議のような活発な検討ができました。各グループの検討結果発表のあとで、講師から模範検討例が提示されました。まさか、とは思いましたが、やはりこれも AI に答えさせた、とのことでした。模範検討例に納得はしましたが、自分の中で納得できないものがありました。非行少年や被虐待児、様々な影を持つ保護者とのドロドロとした関係の中で仕事をしてきた私は、多くの間違いを犯し、そこから学び、また彼らに助けられ、正解に近い回答を提示できるようになりましたので、簡単に正解を出す AI に拒絶反応を起こしたのかもしれません。

私が今通っている、韓国語教室の先生は、翻訳の仕事もしています。この先生も、最初に AI に翻訳させるそうですが、これが本当に間違っていない訳文になっているそうです。間違わない AI はすごいです。

間違う、ということは嫌なことでしょう。特に学校では、テストで×をもらい、間違った回答を披露して友人から笑われ、言い方を間違えて友達と仲たがいし…、間違うことで、傷つき落ち込みます。でも、間違うことで得られることはないのでしょうか？　間違うことはダメなことでしょうか？　もちろん、取り返しのつかない間違いはダメです。間違って人を殺めてしまった、はダメに決まっています。そんな大きな間違いではない、小さな間違いの連続が、人を大きく豊かに成長させるのではないかと思うのです。正解ばかりを体現してきた人より、多くの間違いを犯しながらも成功を収めた人に魅力を感じるのは、私だけではないと思います。私が非行少年たちと長く付き合ってこられたのは、そんなことが理由かもしれません。

さて、この“間違わない AI”ですが、国では’21 年度から 10 億円をかけて、虐待が疑われる子どもの一時保護について、その必要性を判定させるシステムの開発を進めていました。しかし、そのテスト段階での判定ミスが 6 割に上り、AI は虐待の判断にはなじまず、実用化は困難と国は結論づけました。三重県では‘23 年に 4 歳女児の虐待事案に対し「AI システムによる評価を基にして」一時保護せずに、結局虐待死させてしまう、という事件が起こっています。こんな事件後も三重県では AI 判定システムの開発、利用を継続するそうです。人材が不足しているのは分かります。仕事が過酷なことも分かります。判断に迷った時、“間違わない AI”に頼りたくなるのも分かるのですが、何か間違っているような気がします。映画「ブレードランナー」の世界がそこまで来ている今、機械ではなく人の成長に、より関心を向けるべきだと思うのです。

「児童虐待に関して一時保護の是非を AI が判断することは？」と AI に聞いてみると「1 倫理的な問題 2 透明性と説明責任の欠如、3 文脈の理解不足、4 法的な責任の所在、に問題点があり、『判断補助ツール』には妥当だが、『最終判断者』としての活用は現時点では妥当ではない」そうです。

私は、福祉や教育、医療など人に関わる仕事は、人間にしかできないと思うのです。不完全な人間が不完全な人と関わり、失敗しながら、修正しながら、お互いに落としどころを探すのです。面倒です。大変です。簡単に答えは出せないのです。私は簡単に正しい答えを出す AI が嫌いです。ちょっと使ってますが…

AI の話から外れますが、若者には「タイパ(タイムパフォーマンス)」が重要なようです。撮りためたドラマを倍速で見るのは普通だそうです。物語の筋が分かればいい…、わけないんじゃないですか？　私が大好きな映画「グラントリノ」中で監督・主演を務めるクリントイーストウッドが良く飲んでいたビールが「パブストブルーリボン(アメリカの激安ビール)」だ、ってことに気づけないでしょ？倍速では。